

## 「ウズベキスタンでの国際協力活動」

若松 千佐子 (ウズベキスタン)

2014年2月17日から、配属先の血液学小児病院で0～15歳の入院治療中の小児がん(主に白血病)の子どもたち50名を対象に青少年活動を開始し、7カ月が経ちます。

ウズベキスタンの首都タシケントは、暮らしやすく心地が良いです。使用言語のウズベク語の習得に伸び悩み、現地の人と意志疎通が図れず葛藤することも多いですが、立ち止まって私の声に耳を傾けてくれる優しい人たちが沢山います。時間の経過とともに、配属先では、プレイルームが開く午前9時前から扉の前で子どもたちが色紙を抱えて待っていたり、出勤後、着替えている際に「チャロスオパ! (私のウズベクの名前)」と子どもたちがやってきたりするなど愛着関係が形成されはじめたり、保護者からも「病室でこの子と遊んでほしい」と頻繁に声が掛かるようになったり、同僚とも病院では避けられない子どもの死など辛く悲しいこと、子どもの成長などの楽しく嬉しいことを共有できるようになりました。

2014年、ウズベキスタンは「子どもの健康の年」です。毎年、政府が強化する政策内容で、その年のテーマが決まります。6月1日はウズベキスタンの子どもの日。そこで配属先のニーズに応え、初めて「こどもの日ーウズベキスタン・日本文化祭りー」というイベントを企画、開催したので紹介します。

5月5日は日本の子どもの日、6月1日はウズベキスタンの子どもの日です。小児がんと闘う子どもの成長を祝うことは、子どもや子どもをケアする保護者を支援する上で非常に大切です。病気の子どもの行動制限があるため、イベントで青年海外協力隊員を通じて国際交流を深めたり、日本文化を学習したりすることは、子どもの人間関係や世界観が広がるきっかけとなると同時に、子どもの心身の健やかな成長を助長することになります。

また、付き添い入院しながら、子どものケアに日々尽力する保護者の疲労は計り知れません。その保護者をねぎらい、憩いの時間を提供することを目的としています。

私はコーディネーターを努め、企画、調整、準備、実施を行いました。日本文化を紹介した背景には、現地の人たちは東洋人というと韓国や中国のイメージが強く、「日本人です」と伝えてもなかなか覚えてもらえなかったことがあり、日本のイメージを具体化するために茶道のデモンストレーションを行いました。また、ウズベキスタンの人びとは、老若男女、音楽と踊りが好きです。そこで、ドゥターールという楽器を習っている隊員による演奏や、音



裏面には千羽鶴の折り方、当日提供した現地にあるもので作れるバームクーヘンのレシピを載せ、ひとりひとりに配付した。

楽隊員の得意とするビオラ演奏で、子どもと保護者を癒したいと思いプログラムに取り入れられました。ウズベクの音楽や詩の発表は、イベントのテーマを聞いた同僚の保育士の提案で組み込まれました。当日は楽器演奏、日本文化紹介、記録等を担当してくれた隊員たちの協力、イベントの司会や音響を担当してくれた保育士の知人（地域の人）、イベント企画を承諾し会場を作ってくれた同僚たち、イベントを心待ちにしながら日本人ボランティアたちを快く歓迎してくれた子どもと保護者など、本当に多くの人に支えられながら無事に終わることができました。6月のタシケントは連日 30℃を超え非常に暑く、病院の庭（屋外）でのイベント開催は控え、小さなプレイルームの中で実施することを考えていましたが、医師と話し合った結果、長時間でなければ外でも大丈夫だろうとの助言をもらい屋外での開催が決定しました。ウズベク語がままならない私の話に耳を傾け、歩み寄ってくれる同僚の温かさを知り、言語を通じて共通のイメージを持つことの難しさを知る等、本企画を通して多くの学びを得ました。



ウズベキスタンの伝統的な帽子「ドッピ」や「アドラス」生地の民族衣装を身にまとった JICA ボランティア、JICA 関係者によるウズベキスタンの民族楽器「ドゥタール」の演奏。首都タシケントにあるウズベキスタン・日本人材開発センター（国際交流基金）で習うことができる。

また、イベント時に日本茶（緑茶）とお菓子を用意し、みんなに紹介しながら試食してもらいました。お茶を飲んだ感想は「ちょっと苦いね、でも美味しいよ」「お菓子、もう1つちょうだい！」などでした。イベント終了後、浴衣（子ども用、大人用）と折り紙を持って隊員の協力のもと、全病室を回りながら子どもと保護者に浴衣の着付けをしたあと、記念撮影や、折り紙で鶴や風船を折ってプレゼントをしました。気付くと約 3 時間が経過していましたが、治療でイベントに出ることが出来なかった子どもや保護者のケア、そして、もっと日本人や日本文化と身近に触れ合ってほしいという当初の目的を果たすことが出来ました。普段プレイルームで接する子どもたちは限られているため、関わりが薄い子どもがいたことが気がかりでしたが、病室を巡回して日本文化紹介を実施することができ、非常に有意義な時間となりました。

浴衣に着替えた保護者が照れながらも「おしんになれた！」と大喜びする姿を見ることが出来てなによりうれしかったです。子どもたちも「楽しかったね。次のお祭りはいつ？」「来てくれた日本人はウズベキスタンで何をしているの？」と非常に関心を示し、とても楽しんでくれたという印象を持ちました。子ども、保護者、同僚にとって笑顔が溢れる一日となり安心しました。



イベント開催後は、写真を現像して子どもと保護者に渡したり、学童児と一緒にイベントに来てくれた隊員たちへのお礼状を作成しながらイベントを振り返る場を設けました。何かをしてもらえるのが当たり前ではなく、御礼をきちんと言うことを習慣づけるなど、子どもと接する中で子どもの情操が育まれるような活動をするように心がけています。「絵を描いてね」と声掛けすると、子どもが自ら日本の国旗やJICAと書いてくれました。意図的にイベントタイトルに「日本」と入れ、プログラムには「JICA」のロゴを入れて配ったということも影響していると思いますが、やはり日本人ボランティアの隊員たちが子どもたちと沢山、丁寧に関わってくれたからこそ、子どもの記憶にしっかり刻まれたのではないのでしょうか。